序

小林良彰先生は、二〇二〇（令和二）年三月末を以て慶應義塾大学法学部を定年退職される。小林先生は、一九七三（昭和四八）年四月に塾法学部政治学科に入学され、七七年三月に卒業後、同年四月に大学院法学研究科修士課程政治学専攻に進学、七九年に同課程を修了の後、直ちに同研究科博士課程に入学され、八二年三月に同課程を単位取得退学された。同年四月より、先生は法学部専任講師に採用され、八六年に助教授、九一（平成三）年に教授にそれぞれ昇任し、現在に至る。この間、実に三八年の長きに亙り、法学部にご尽力を賜った。

小林先生のご研究は、同じ堀江湛先生門下の弟弟子であられる河野武司教授によれば、主に五つの分野から成る。すなわち、代議制民主主義の比較研究、日本の政治意識および投票行動の研究、公共選択の研究、地方自治の比較研究、そして政治関連データベースの構築がそれらだが、それらのいずれにおいても先生は、統計学を用いた計量的な実証分析に基づく一般理論の構築を目指された。

本誌巻末には小林先生がこれまで発表された夥しい数に上る研究業績の一覧が掲載される。一九八五年に発表された『計量政治学』（成文堂）は、日本における政治意識や投票行動に関する論文をまとめた小林先生の博士学位論文である。前出の河野教授のご教示によれば、このご業績により先生は、政治領域における計量的な実証研究の先駆として学会で大いに注目を集められ、同年に義塾賞を、八七年には政治研究櫻田会金賞の授与をされている。同じ八七年に上梓した、『公共選択』（東京大学出版会）では、鋭い数理的な分析が展開され、政治現象の新しい説明のモデルを提供したとされ、中国語や韓国語にも訳出された同書は、今も大きなインパクトを各国

の研究者に与え続けている。また、九七年に公刊された『現代日本の政治過程――日本型民主主義の計量分析』（東京大学出版会）は、それまでの先生のご研究の枠組みを拡大し、実証分析の手法を日本の政治過程全般に及ぼそうとの意欲と知的好奇心に溢れた作品であった。

二〇一二年には、『政権交代』（中央公論新社）を発表され、民意と政権との関係を新書版で一般の読者に分かりやすく説かれた。小林先生は、国政選挙の際に選挙結果の解説等で、マスコミや報道に取り上げられることの多い、まさに学部の「看板教授」のお一人であった。

多くの研究成果を世に問い続けてきた小林先生は、学会やさまざまな社会活動でも要職を務められた。日本政治学会、日本選挙学会、そして公共選択学会では、それぞれ理事長や会長として、また海外の学術誌、例えば、*International Political Science Review* の編集委員としても活躍された。二〇一八年には、先生の長年の功績が評価され、シンガポールにおいてCMO Asia から、アジアにおける優秀な社会科学者を讃える Asia's Education Excellence Awards を授与された。

また、先生は、第二二期日本学術会議の副会長や、文部科学省国立大学法人評価委員会国立大学法人分科会委員など、政府や地方自治体の数多くの各種審議会や委員会等の委員をお務めになられている。それらの公的な要務に携わるご多忙の毎日にありながら、小林先生は、学問の新境地を切り拓いて今日まで歩んでこられたのである。

法学部内では、小林先生には長い間、情報処理・ネットワーク関係の管理や運営をお願い致し、また、大学全体の情報処理教育の運営委員もお務め頂いた。もちろん法学部の数学・統計・情報処理教育に関わるリーダーシップも存分に発揮して頂いた。だが、なによりも特筆すべきは、二〇〇三年度から〇八年度にかけて実施された二一世紀ＣＯＥ「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成――多文化社会における市民意識の動態」の拠点

責任者となられたことであろう。法学研究科政治学専攻を中心に、世界水準の研究力の向上と「世界をリードする創造的な人材育成」を目指した研究拠点の形成に、小林先生には多大なるご尽力を頂いた次第である。

そして、若い学生や研究者の卵たる大学院生たちに対する小林先生の薫陶と手厚いご指導についても触れなくてはならない。研究会の卒業生は五〇〇名を越え、門下の研究者も二〇名近くが大学に職位を得ているという。先生は、教育者としても多くの果実を世に送った。

私事ながら、かつて学部のある重要な用務について小林先生を引き継ぐ立場にあった時、先生は「どんなことでも聞いて下さい。遠慮をして分かった気でいてミスが生じることがあってはならないので。」と仰られ、くるっと踵を返して廊下の向こうに行ってしまわれた。小さくなる小林先生の背中を見て、シビアな先生だなとその時は思ったが、その後、業務の要領をなかなか会得しない私に徹底的に関わって下さった。ある時は早朝の大学で、またある時は夜半に及ぶご自宅への電話で、倦むことなく先生は私に向き合って下さった。若かった私は、そこに小林先生の業務遂行に対する妥協のない厳しさを見た思いでいたが、最近になって、それは先生の優しさだったのだと分かった。

ここに、小林良彰先生の長年に亙る法学部へのご貢献に厚く御礼申し上げるとともに、今後のご健勝とご活躍とを心から祈念し、法学部として本号を謹んで進呈させていただきたい。

二〇二〇年一月

法学部長　岩谷十郎